

From 商学部長

学内学生スタッフと社会ボランティア

商学部長 やま だ ひさ かず 山田 壽一

入学式翌日から始まった新入生のプライムセミナーでは、先輩の学生諸君が自主的に参加し、新入生に履修登録の仕方を始め、友達作り、キャンパスライフの不安や疑問の解決のためのアドバイスを行う光景が見られました。

新入生のアンケートの集計結果によれば、「プライムセミナーのスタッフはよく相談にのってくれたか」に対し、「はい」と答えた割合が94.8%で、新入生にとってこれから始まる学生生活に役立ったと推測できます。一方では学生スタッフの全員から「スタッフとして働いたことが楽しかった」、また「来年度も学生スタッフをやってみたいか」に対する86%のポジティブな回答からも、プライムセミナーのスタッフ活動を通じて多くの事を学び、喜びや発見、充実感を得たことと思います。

まず、学内学生スタッフから

学内における学生スタッフとして活躍できる場は、「プライムセミナー」をはじめ、「オープンキャンパス」、「ピア・サポーター」などがあります。学生スタッフの活動はそれぞれイベントの目的達成だけではなく、スタッ

フ自身にも得るものがあります。たとえば、企画運営などの経験をするにより、多くの人たちとコミュニケーション能力を高め、自身の成長にも繋がっていくことでしょう。

学生スタッフの経験が地域社会のボランティア活動に参加する切っ掛けになると、一層社会との繋がりが広がっていき、より豊かな学生生活になるものと思います。まず、足がかりとして是非学生スタッフに参加してみたいかがでしょうか。

次に社会ボランティアへ

一般社会でもボランティア活動が注目されています。ご存じのように1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災以後、多くの方がボランティアに参加し活躍しています。そもそもボランティア活動とは何かといえば、他者や社会のために金銭的な利益を第一に求めない自主的な活動のことです。誰もが暮らしやすい豊かな社会を目指して、様々な人や団体とつながりネットワークを作りながら社会の課題の解決に取り組む活動のことです。ボランティアの4原則は、「自主・主体性」、「社

会・連帯性」、「無償・無給性」、「創造・開拓・先駆性」ですが、「無償・無給性」については、活動自体の有償・無償を問うのではなく、自発性や連帯性に根ざした活動であるか否かが、最も重要である事から「非営利性」という表現をする場合もあります。最近ではより多くの方がボランティアに参加できるようになりましたので、皆さんも社会ボランティア活動に積極的に参加すればいかがでしょうか。



プライムセミナーの様子



プライムセミナースタッフ

本学の「生涯学習センター」は、別名アクティブセンターと言います。アクティブとは、ACTIVEと書き、“Active Center of Thinking of the Incentive & Valuable Exploration”の頭文字をとったもので「刺激と価値ある研究と思考を絶えず続けさせるための活動体」を意味しています。地域の大学としての役割を担うことを目的として1990（平成2）年6月に発足しました。

アクティブセンターの役割

大学がその目的を達成するためには、他の様々な組織体と協働してお互いの諸関係にwin-winの状態を達成しなければなりません。それはとりもなおさず学生にとってもまたその地方にあっての魅力ある存在となるでしょう。

いまこそ地方の大学はその役割を自覚すべきです。すなわち、地（知）の拠点すなわち地域社会と大学との連携（COC: Center of Community）を積極的に構築すべきなのです。いかなる学問も、ただ崇高にして人里離れたところに鎮座してはいけません。アクティブセンターはそれを具現化する大きな窓口を備えておるのです。



ITパスポート試験対策講座の授業風景

オープンカレッジ

アクティブセンターは、社会人の生涯学習と学生の勉学をカリキュラムの外側から支援することに全力を挙げています。大学教育と社会教育の調和と相互推進にあって、老若男女を問わず、またあらゆる年齢層に対応すべく高度な調整が実施されることです。それは大学が大学たるもう一つの特性にほかなりません。オープンカレッジの展開は、その方向性の「見える化」の一方策なのです（本年度は「経済」、「地理・歴史」、「語学」等6ジャンルに26講座を開講）。

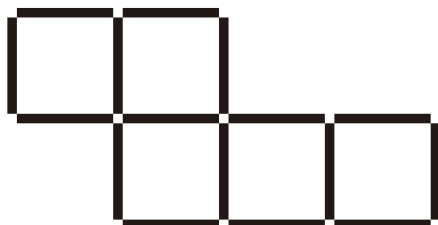
学部学生は一般市民に混じってオープンカレッジで受講します。一般市民は先輩であり、すでに豊富な人生の経験者です。学生はそのような人々に強い影響を受けることになるでしょう。オープンカレッジは講座を「春期」と「秋期」の2つに分けています。それぞれ5月から7月、10月から12月で実施されます。また春期・秋期を通して学ぶ年間講座、あるいは資格取得講座など試験日に合わせて設定する講座もあります。

そのなかで今回特にご紹介したいのは「資格取得講座」です。2017年度では国家資格取得講座に「FP（ファイナンシャル・プランナー）3級講座」、「行政書士講座」、「宅建士講座」、「ITパスポート試験対策講座」があり、その他にも資格取得のために12講座が開講されています。これらの講座は資格試験日に対応するように設定されるため、講座期間は多岐にわたります。ただし、オープンカレッジでは、学外一般の人を対象とするため受講料が発生しますが、本学の正規学生が資格取得講座を受講する場合、受講料は半額となります。さらに国家資格試験に合格すれば、拠出した半額の授業料分の奨励金が支給されることになっておりますので試験に合格すれば実質無料となります。これは学生にとっては、励みになるのではないのでしょうか。いかがでしょう。皆さん！大いに参加してみませんか。

Essay

オリジナルを楽しもう！

私の専門は数学です。数学が楽しいと思っている学生のほとんどは「解けたときが楽しい」と言います。それでは、次の問題を考えてください。（実際に筆記用具などでやってみましょう）



問題1： 左の図から、棒を2本動かして、
4個の正方形を作りなさい。

問題2： 6本の鉛筆で4個の正三角形を作りなさい。

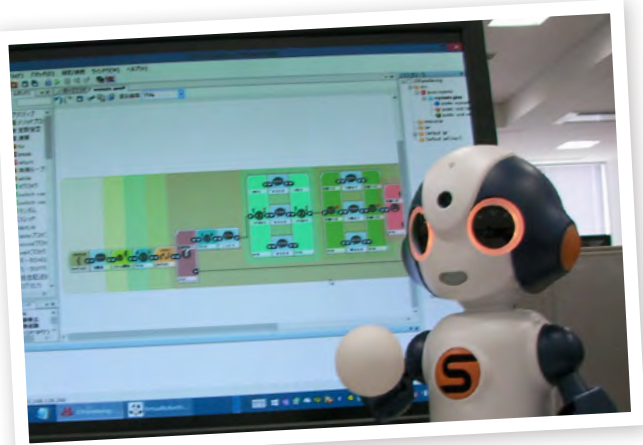
最近、私は折り紙やパズルゲームに関連する研究集会に参加しています。大学教員だけでなく、医師、プログラマー、会社員、学生など参加者の得意分野や価値観はばらばらです。そんな人たちに共通していることは、“オリジナル”の結果に楽しみを感じていることです。

勉強も仕事も同じです。やれと言われたことがうまくと最初

近頃、新聞やテレビでは、毎日のように接客ロボットや自動運転などの新たなテクノロジーの話題が取りあげられています。人工知能やロボット技術の高度化により、これまでのコンピュータには出来なかったことが可能になり、「コンピュータが人間の知能を超える」、「人間の仕事がなくなる」などと言われています。確かに、コンピュータの高性能化、インターネットの普及、情報処理技術の高度化により、急速に知的な情報処理が可能になってきています。しかし、コンピュータによる知的な処理は、我々が抱く知性の在り方とは大きく異なっているのが実際のところですよ。

学生の皆さんには、コンピュータがどのような方法で情報の処理を行っているのかを理解することにより、その可能性と限界を見極め、コンピュータの高度化を過剰に恐れたり、あるいは過小評価することなく、有効に活用するための能力を身につけてもらいたいと考えました。

このたび特色ある教育活動として、コンピュータコミュニケーションの講義で、コミュニケーションロボットを利用する機会を頂きました。その目的には大きく3つあります。一つ目は、ロボットが人間とコミュニケーションする方法の仕組みを知り、それをビジネスや社会にどの



プログラミング画面とsota

ように活用するかを考えること、二つ目は、簡単なロボットプログラミングを行うことが出来るようになること、三つ目は、ロボットとのコミュニケーションを通して、我々人間同士が当たり前に行っているアイコンタクトや相づち、身振り手振りなどの重要性を知ることです。

利用するロボットはsota（ソータ）と言い、顔認識、性別・年齢・笑顔判定や音声認識、発話機能を持っています。sotaはパソコンソフトを使って、あらかじめ用意された命令のブロックを組み合わせることにより、プログラミングを行ったことがない人でも、比較的簡単にロボットに行わせたいことを命令することが出来ます。sotaは、飲食店や介護施設などでも実際に利用されており、飲食店では、お客さんの顔や注文内容を覚えておき、次の来店時には、別のメニューを提案することや、音声で注文を受け付けるなどで利用されています。また、介護の現場では、話し相手やいっしょに運動をするなどの用途に利用されています。

ロボットの活用は、まだ始まったばかりで、今後どれくらい我々の生活に密着したものになるかは分かりません。しかし、ビジネスや少子高齢化への対応としての可能性が見出せば、企業や家庭、個人向けなど、様々な用途でロボットの活用が試みられるのではないのでしょうか。未来を言い当てることは難しいですが、スマートフォンが現在のように一人一台持っているのが当たり前になることも言い当てることは困難であったかと思います。1つのテクノロジーにより、社会のルールが大きく変わってしまうということは充分考えられるので、それに備えておく必要があると思います。

ただし、どのような未来になるにしても、我々が考えておかなければならないのは、便利さや効率化をやみくもに追求するのではなく、どこまでそれが必要であるのかや、新たなテクノロジーによる技術革新が本当に人を幸せにするのかなどを考え、社会としてそれを受け入れるべきかの選択もして行かなければならないと考えます。

は楽しい。しかし、本当の楽しみはその先にあると思います。上記の問題はよく知られた問題で模範解答も面白いですが、オリジナルの解答や発展版のオリジナル問題などを考えるとまた違った楽しさが味わえます。土台となる教養を学ぶことからオリジナルの研究まで、いくらでも楽しめる環境が大学にはあります。ぜひ何か1つでもオリジナルの結果を持って卒業してください。偉そうに言いましたが、私もみなさんに負けずにまだまだ努力したいと思います。

なお、上記の問題に対する質問や感想は松原和樹（研究棟711）までお尋ねください。





2017年4月より商学部でお世話になっております浅井宗海です。大学教員になったのは、前任校を含めて丁度10年目で、その節目の年に本学に着任できたことは誠に光栄です。

これまで情報技術に係わる教育一筋に勤めてきており、大学教員になる前は

経済産業省のIT人材育成政策の支援とそれに基づく情報技術者教育を長く担当してきました。本学でも情報分野の科目である情報科学概論、マルチメディア論、情報環境論、ネットワーク論、プログラミングⅠ・Ⅱ(C言語)などを担当します。

ところで、情報処理産業で働く人材育成に長く係わってきた経験から、情報処理技術者には、①道具としてICTを使う技能(プログラミングなどの実装技能)、②ICTの原理や理論に関わる技能(アルゴリズムやモデル化などの中核技能)、③ICTを問題解決等に利用するための

汎用的な技能(基本技能)の三本の柱が必要だと考えております。ただ、情報技術教育というと実装技能と中核技能の二つが注目されがちです。しかし、上流の技術者になればなるほど基本技能であるジェネリックスキルの重要性が増します。そして、この技能は、驚いたことに、商学部が掲げるディプロマポリシーの育成項目そのものです。したがって、ICTの知識・技術だけではなく、ジェネリックスキルも備えた人材育成の必要性を、本学に着任してより強く感じたいです。

研究分野は教育工学で、これまでCAI、教育シミュレータ、eラーニングなど、教育へのICT利用を実践的に研究してきました。現在はビデオ機能をもつeポートフォリオを使って、大学生のジェネリックスキル育成に向けた応用実験を行っております。将来的にはこの研究を活かし、ICTを新たなソリューションに適用できる人材育成を本学にて取り組んでいきたいと考えております。何とぞ、ご支援の程、よろしくお願いいたします。

Pick up

学生スタッフ研修への思い

学生相談室カウンセラー 小池 有紀

本学では様々な取組みにおいて学生がスタッフとして活躍していることをご存知でしょうか。その中には「プライムセミナー」と「ピア・サポート活動」があり、それらの学生スタッフを対象に、学生相談室ではスタッフ研修を担当しています。

上記の取組みに共通する点は“学生が学生をサポートする”ということです。教職員が行うサポートとは異なる、学生同士ならではの関わりが期待されます。学生スタッフの皆さんは既に意欲やチャレンジ精神を持った方々ですが、大学での取組みに参加してもらう上ではその目的や基本的な心構え、留意点などを共有してもらう必要があります。そして大学にはそれらを学生スタッフの皆さんへ教育する使命があります。その一部となる“他者との関わり方”に関する研修を学生相談室のカウンセラーが担っているわけです。

研修ではまず、スタッフ同士が交流し関係づくりが促進される

ようウォーミングアップを行います。続いてグループワークやレクチャー、ロールプレイなどを通して、自分達の役割確認やサポートをする際の基本姿勢、スキルを身につけていきます。限られた時間ではありますが、仲間と関わりながら他者を知り、自分を知る。そしてその関わりの中で生まれたものを味わう。自分の長所や短所に気づくこともあるでしょうし、学生スタッフも多様なキャラクターの持ち主で構成されていますから役割分担をして補い合うことも体験をもって学ぶと思われれます。

サポートをする人もサポートを受けながら、より良いサポートを模索し、活動してもらいたいと願っています。そのためにも、学生スタッフへのサポートを学生相談室からも届けていきます。私達カウンセラーも日々多くの教職員と学生からサポートされていることは言うまでもありません。



研修対象	学生スタッフの活動概要	研修形態
プライムセミナー 学生スタッフ (10月募集)	新入生がスムーズに大学生活を始められるよう、プライムセミナーの準備と当日サポートを担当	年1回 半日
ピア・サポート活動 ピア・サポーター	学生生活でアドバイスを必要としている学生に対して、ピア・サポーターが相談にのる	年3回 一回1コマ